



## ラグビーはかけがえのない存在 日本を代表して戦いたい

豊田自動織機シャトルズ愛知

松岡 大和さん(23歳)

©Yumi Hattori

令和3年1月、ラグビーの全国大学選手権で主将として天理大学を関西勢36年ぶりの日本一に導き、試合後のインタビューで喜びを爆発させる姿が『絶叫キャプテン』として注目を集めた市内在住の松岡大和さん。「素直にうれしかったです。チームのみんながサポートしてくれたから勝ち取れた勝利でした」と振り返ります。

ラグビーで日本一に輝いた松岡さんですが、小学生の頃はラグビーが大嫌いでした。「サッカーはボールを前に投げたり、蹴ったりすることができると、ラグビーは前に投げたら駄目だし、後ろに下げながらやるので、何が楽しいのかわからなかったです。テレビで見ると嫌いで、兄に消してほしいと頼んでいた」ほどの拒絶状態。しかし、中学の部活動勧誘のとき、兄の後輩のラグビー部の人たちに、無理やり部室に連れて行かれてラグビーを始めます。「でかい男の人たちに囲まれたので逃げられず、流れのままにと不意ながら入部するも、コーチからタックルバッグに思いっきり当たってみると言われて、初めてタックルしたとき「こんなに気持ちいいんだ」と魅了され、「蹴れるし、投げられるし、ボール持つて走れるし、ラグビーって何でもできて面白い」とすぐにとりこになります。

松岡さんが勝ちにこだわるようになったのは、大学2年生のときの全国大会での明治大学との決勝戦。結果は負け。松岡さんは出場機会すら与えられませんでした。「負けたこともですが、試合に出してもらえなかったことが悔しかった。もっと流れを変えられる力があつたら、絶対出られた

はずなのに」と自分の無力さを痛感。しかし、ここで腐つてられないと自らを鼓舞し、大会後から死ぬ気で練習を始めます。「オフ期間もあつたけど、家に帰らないで大学ですつと練習しました。この悔しさを忘れないようにと携帯画面を負けたときの写真にしてみました」と敗北の経験が強さを生み、2年後、頂点を勝ち取ります。

大学卒業後の進路として一度は社員選手として別チームに入団するも「やっぱりラグビーが好き。ラグビーに集中したい」とわずか4カ月で退団し、プロ選手として豊田自動織機シャトルズ愛知に入団します。「ひたむきに頑張る人たちが多いので、一緒に練習していて楽しいです。良い意味で競争が生まれて、お互いに高め合える雰囲気が出ています」と話す松岡さん。さらに「プロとして、食事から体のケアまで、自分の体作りを今まで以上に追求するようになりました。もっと強くなるために今は必死に勉強中です」と笑顔を見せます。

人生をラグビーに懸ける松岡さんは、その魅力について「フーサイドの精神。プレー中は敵同士だけど、笛が鳴ったらお互いの健闘をたたえ合います。試合後、敵チームと和気あいあいと話し合えるのはラグビーだけなんじゃないかな」と話します。今後について「リーグワンですすはディビジョン2に上がることを。そこから日本一を取るために、個人としてもチームとしても成長したい」と目を輝かせます。どこまでも熱く、真つすぐにラグビーを愛する松岡さん。最終目標として掲げる日本代表として、桜のジャージーに袖を通す日は近いかもしれません。

cover

3月12日、急に春が訪れたかのようなポカポカ陽気に誘われ二ツ池公園に行くと、お花見を楽しむ家族がいました。実はお母さんのおなかには新しい命が。おなかの中の赤ちゃんも家族に囲まれて、春の訪れを満喫しているんだろうなと感じました。

